



Namino/Yukusaki

著:chairo
絵:奏詞そして

夏の終わりに目覚め、
百花繚乱紛争調停委員会を抜けた七稜アヤメ。
行く宛もなく、キヴォトスを彷徨い続ける。
そんな彼女を拾ったのは、内海アオバだった……。
灰暗い内での、共同生活が始まろうとする。

これは、^エ ^ピ ^ロ ^ー ^グ 終わりの詩。
凡てが終わり、枯れ落ちた菖蒲の華に捧げられる一つの^黙 ^示 ^録 詩。

サークル：Project-Leonard

Namino/Yukusaki

著 chairo

Illustration:奏詞そして

Contents,

First episode KARUNA.——P3

Episode I , audioletter.——P7

Outer side ten.(天)——P36

Episode II, NaminoYukusaki——P38

Outer inside sho(翔)——P61

last episode Chikyu ga Warau Hi,——P75

Epilogue Hoshi no Yō ni…… (星のように…)——P93

first episode 【KARUNA】

ゆるやかに躍る 灯は

何かを伝えようと 燃え尽きても踊る

朝までは保たないと知っていても――

あきらめの悪い灯は

夜明けが来ようとも、ひたすらに闇を待ち侘びる

夏の終わりと、伴に

漆いキャンバスに 烈く打ち喚らすような……。

KARUMA
罪は喚く

夏の終わりに、彼女は目覚めた。

だけど、目覚めて直ぐに、アヤメは理解した。

醜い自分に、現^い在^まの百花繚乱に、自分の居場所などないと。

だから——勿も告げずに、彼女は去った。

自分が生きていていい居場所などなかったから。

これは、終わりの詩。

凡てが終わり、枯れ落ちた菖蒲の華に捧げられる一つの詩。

それでも良ければ——私は、話そう。

七稜アヤメという華が辿った、顛末を。

Episodel. audioletter.

体が重い。

もう三日、なにも食べていない。

ここは：ハイランダー辺りの、廃線の外れだろうか。

とどこどころ使われてないか、廃車になったのかはわからないが、：錆びた鉄の匂いと、ネズミの鳴く声がする。：食べ物にありつけてさえないのだから、：私はネズミ以下か。

鼠以下。：それでもいいか、と思っていた。私は人間ですらない、化物なのだから。

あの日、クズノハに会いたい、なんて思わなければ。私の軀は「怪談」にされずに済んだのだろうか。

私は、追放された罪人なのだから。こうなったのも、：当然だ。今の百花繚乱に、わたしがいる資格はないのだから。

——寒くなってきた。

寂れた車屋の、奥で眠ろうという考えすら今の私には思い浮かばなかった。
…行き倒れ。これが私への罰なのだとしたら、…御笑いもいい所だと思う。

これを知ったら……ナグサは、私を、嗤うだろうか。

私には、居場所がない。

居場所が無くなった者に待つのは、死しかない。

このまま安楽に何もかも終わればいいのに、と思つて、私の意識は獄に堕ちた。

あの、と呼ぶ声が聴こえた。

…気がついたら、私はソファの上にいた。

「き、気がつき……ましたか？」おずおずと、目の前の彼女は声をかける。

「……あなたは」「う、内海アオバ……と、いいです。…その、ハイランダーの……」

「そう、」…そう言っ、内海アオバは状況を把握しようとする私を、観察するかのように見つめていた。

その意識がどこことなく不可解に感じ、…私は少し圧を入れながら訊こうとする。

「…よく、飲み込めないんだけど。何故私を拾った？」

「え……いや、その……」

びく、とアオバは震えてしまう。

「て、点検をして来いって言われて…」

「こんな時間に？」「…決まりなんです」そう言っ、彼女はうずくまってしまった。

話が進まないの、ここはスルーしよう。

「それで、何故私を」「それは……」

沈黙が続く。…仕方なく、「言いたくないなら、言わなくてもいい」と切り捨てて、此方から話を終わらせた。

数瞬して、アオバの方が話しかける。

「あ、あなたこそ…、なんで、倒れていたんですか？」 「……私は、行くところが、なかったから」

「そう、なんですね……。 」やはり、会話が続かない。

此方の状態から、学校を追放されたヘルメット団やブラックマーケットのチンピラ達より危機的な状況だったのは、伝わっただろう。

——要するに、私はもういいだろう、と此の場を後にしようと決めた。

「じゃ、私は」「え!? ……どこに、行くんですか？」

「助けてくれて、ありがとう。それじゃ」「…あ、あの……!!」

「……？」何故、アオバは声を掛けようとするのだろうか。

「だから、『どこに行くんですか』って、聞いてるんですけど……!!」彼女は声を高くした。

それは『声を荒げる』という表現には、あまりにもか弱い叫びだったと、思う。だけど、この子がここまで聲を出そうとした事自体に、…私は驚いていた。

「別に、行くところなんかないよ。ただ。…これ以上、私に関わらない方がいいよ。」そう言っ、私は去ろうとする。元々行くところなんてなかったし、これから生きていこうとも思っていない。

それだけだった。…だけど。「……待ってください！」内海アオバは私の手を掴んだ。

「何？」「……えっ、その、……だけど」

うずうずと何かを言おうとするアオバ。不思議と此方にいらつきはなかった。

「待ってあげるから、言って。」

「あなたさえ、よければですけど……ここにいても、いいんですよ……？」

「……何故？」……少し語尾を強めに。——苛立ちを顕にする。「ひ……！」

「私を助けても、貴方には何も得はない。……何故、そんなことを言うの」

……アオバは、がく、と怯えてるようだったけど、次の瞬間には話してくれた。

「たっ、助けたのは……私の都合、ですから……責任を、持ちたいんです……！」

「貴方に責任なんかない。……私を拾っても、不幸が寄りかかるだけだよ。」「だ、だって……！ そうだとしても……！」アオバは、意を決したように言おうとした。「だって……あのままだと」

「死んじやいそう、だったから。」

「……………」私は黙る。

「あのまま、誰にも見つけれないところで、死んじやうのは……とても悲しい、ことだと思っんです」

私も、誰にも見つけてもらえない、と思った事がある、から。だから……あなたを。

そ、か。と、私はようやく根負けした、ような気がした。

「貴方さえ、よければだけど」「え…………？」

「……もしよかったらだけど、助けてくれた恩義は返す」

「え…………？」という、ことですか？

そう、声にならない声が聞こえた。——私は、もうここまでにしたい、と思った。……卑怯者を、演じることを。

叶うことなら、もう一度……『七稜アヤメ』を演じるだけの価値が。

私に、あるのだろうか。

「誰にも見つけてもらえないなら、私が見つけてあげる。」

そう、人が変わったように、微笑もうとした。それが「七稜アヤメ」だったから。

「え……？」アオバは、きょとんとしながら。……私の答えを、待っているようだった。

「貴方、……いや、君はハイランダの職員でしょ？」「え？……まあ、そうです、け

ど……」

ハイランダの自治区の職員なのは、校章で分かっている。

「もしよかったら、君の仕事を手伝うよ。……付け焼き刃でよければだけど」

えっ、とアオバは少し、驚いたようだった。

「そ、そんな……！大丈夫、ですよ……。」

「ううん、借りっぱなしは私の気が済まないし……それに、何もしないわけにはいかないから」

そう言って、微笑もうとしたけど……。

辛い。

私の頭にノイズが走る。怪談のそれじゃない、呪われた記憶の残滓が。

本当に、お前にそんな価値はあるのか？ さっきと出て行った方がいいんじゃないか？

お前は、誰にも見つけられずに、死ぬべきなんだよ。

「大丈夫、ですか？」——平気だよ。」

私は、苦痛を噛み殺す。痛みも、苦しみも、無理やり消してしまえばいい。かつての私が、そうだったように。

「答えは貴方が決めていい。邪魔になったら、捨てていいから」

そう、自重気味に笑みを浮かべる。「そういうのが、よくないと思うんですけど。」

そう言ったけど、アオバは戸惑いつつも、言った。「……よろしく、お願い、します。」

次の日からの……手順は教えますから。——今日はもう遅いから休んでください。

そう言って、アオバはソファの毛布にくるまろうとする。「……ベッド、使っていていいですか」

「えっ……、いいよ。私が、ここで寝るから貴方はベッドで寝て」

聞きそうになかったので、……そう言って、ぐいぐいとソファから剥がして陣取った。

「そ、それじゃ……おやすみ、なさい」……追いやられたアオバは、申し訳なさそうな顔をして寝室へと向かった。……これでいい。

私はソファに軀を預け、眠りにつく。意識は、何も考えなくていい分素直に落ちた。

「……おはようございます」という声で、私は目を覚ます。

今は七時だ。「……おはよう」

アオバに連れられ、ハイランダーの事務所へ向かう。

「あれ、誰？その人」…朝礼で、管轄の上役らしき人に声をかけられる。当然か。

「ぼ、募集で来てくれた、……パートさんです」

「ふーん、まっいっか。」……車掌は、渾身のアオバのでまかせをスルーした。……それでいいのか？

「キミ、百鬼夜行の生徒だよね？制服に書いてあるし。遠いところからよく来てくれたね、じゃよろしく」……はい。よろしくお願いします」

単発だろうから、だいたいアオバに聞けば分かると思うよー。そう言って、朝礼は終了した。

それが、こんなことになるなんて。

「ちょ、「叩けば直る」って、そんな無茶な……!?!」

「……え?……こうすればっ、大体直ります、けどっ……!!」

驚くべき事にアオバは、踏切遮断機の故障を叩いて直そうとしていた。

流石にそれは、と私は止めようとするが、アオバは遮断機を叩くのをやめない。……どうしたものか。

「百鬼夜行きの路線が遅れてる理由が分かったよ。ほら、貸して」

遮断機の、アオバが無理やり掘り込みようとしたビスに対して、ドライバーを持ち丁寧に力を入れていった。

「す、すごい……!」「そんな褒めること?」

「ここじゃ、あんまり教えてくれる事がないので……」「……なるほど」

……改めて、この子が培ってきた環境がどのようなものか、伺えた。

9月が過ぎ、……10月になった。

「はい、今日もおつかれー。…それで、今月の業績の件なんです」

と、上役……ハイランダー本部の監査役である橘ノゾミが顔を出す。

「は、はい……」と、アオバは縮こまるが。

「最近、この評判がいいんだよね！ 設備故障での事故も減ったし！」 「え、

ええ……??」

「そうですか、ありがとうございます」アオバは困惑していたけど、私は素直に頭を下げた。

「あつ、アヤメちゃんお疲れー！ 今回の件なんですけど、いつも残業とか出てもらってる少しボーナスしといたから！」

「よ、よかった、ですね……。アヤメさん」「……はい。ありがとうございます」

私は複雑な思いで、その謝辞を浮けとった。

「アヤメちゃん、事務所内での評判もいいし……いっそのこと百鬼夜行から転校しちゃう。あつてもそれってマズいかな？」

「いえ……学校の事は大丈夫です。私は……除籍扱いですから」

「あつ、なんかこれマズかった？ ま、私達は気にしないからだいじょうぶだよー」と、その時だ。何か騒々しい物音を立てて、人が入ってくる。「……あ」

この区画のオーナーだ。視察に来たらしい。「お、お疲れ様です！」

「随分調子に乗ってるらしいな」「…は、はい」そう言って、幹部はアオバをじっと見つめる。……鬱陶しいな。

「最近じゃ、どこぞの馬の骨にすら劣ってるという噂を聞いたぞ。……研修を受けた整備士が、この有様か？」

「う……。」「ちよっと、いきなり出てきて言い方ってものがあるんじゃないのー？」流石にマズいと思ったのか、ノゾミですらカバーに入った。

「貴様もだ。非正規の馬鹿に昇給など、許可した覚えはないが」「別にいいじゃん。……業務に関しては、アンタの管轄じゃないんだし」

「クライアントに向かって、何だ？その口の聞き方は……!!」そう言うのと、……幹部は迷いなく、懐にあった小型拳銃をノゾミに向けて撃った。

ガン、という痛々しい音が彼女の頭蓋に「痛った!! 何するつもり——」「いいのか？お前が撃てば、お前の部下ごと、反乱沙汰で処分するぞ」

お前はそんなこと気にしないだろうが、……お前の部下はどうだ？随分と哀れな上司を持った物だな？そう、ちらつかせる様に奴は言っていた。

……う、とノゾミは、反射的に構えた自分の銃を下ろそうとする。

「……はい。………わ、私がわる——」

「やめてください!!」……だが、アオバがその謝罪を制止しようとした。

「だいたいなんですか、いきなり出てきて文句しか言わないし……!」

「……アオバちゃん」「……ほう。そんなに、首になりたいか？」

「…………それは、困りますけど……………でも、これだとあんまりです!!

……………だいたい、人の気持ちを、考えたことがあるんですか? あなたは……………!」

それでも。アオバは、屈しなかった。……………ぴく、と奴が切れるような音がした。

「……………いいだろう。貴様は今日でクビだ」 「ひっ……………!!」

アオバに銃を突きつけ、迷いなく発砲する――

「そこまでだ」銃弾は逸れ、奴は仰向けに倒れる。

私が、奴の銃を奪ったからだ。「がっ……………!!なんだ、お前……………!!」

「その、馬の骨」だよ。あんた、随分な言い草だな」「何だと……………!!」

私は、ひらひらと奴の銃を回す。「これを返してほしければ、別の部屋で話を付けよう。ボディーガードも呼んだらどうだ?」

ぐっ……と、奴はしかし、勝ち誇ったような表情でスマホに手を伸ばした。

「いいだろう。こんな目に遭わせやがって、覚悟しておけ」……ぞろぞろと入ってきたPMCのセキュリティとともに、私は部屋を出る。

「……ア、アヤメさん！」 「気にしないで。——かつこ良かったよ。アオバ。」

まるで、自分が霞むぐらいに。……そう、私は微笑み、ドアは閉じた。

夥しい数で積み重なった、倒れた人影の奥で怯える奴を尻目に。
私はぼつり、と呟いた。

「私の恩人に、手を出すな」

「最近、待遇が良くなった気がするんです」「……そう」

数日後、突然の賞与の交付にアオバは喜んでいた。

「やっと、休憩や有給も取れるようになったし……、最近、ようやく毎日が愉しくなってきたかなんです。」

そう言って、……アオバは私に向けてにこ、と笑った。

「これも、全部アヤマさんのお陰だったりして……ありがとう、ございます」

「どうだろうね。感謝されるだけのことは、してないよ」

私はアオバに向けて、苦笑いながらも笑い返した。

「これから、……どうか、よろしくお願いします」そう、アオバは照れながら言う。

これでいい。

この笑顔が護れるなら、私は。

その手を、血に染めたって構わない。

「おっはようーう」

後日。いつも通り作業を始めた私とアオバの前に、ノゾミが現れた。

「お、おはようございます……」 「まだ監査の日じゃないよね？　なんでここに」

「いやー、例の件で降格させられちゃってさー、派遣されたワケ。現場監督してこいて……。」